

修了生
からの
お便り



鈴木 理恵
(すずき りえ)

岩手県出身。高校卒業後に渡米。サンフランシスコ州立大学英語学部卒業後、上越教育大学大学院学校教育研究科学習臨床コース総合学習領域（田島研究室）に免P受講生として入学。平成22年3月に修了後、伊豆諸島の東京都御蔵島村立御蔵島中学校に赴任。担当教科は英語。大好きな海と28人の児童生徒に囲まれた場所で、教員人生の第一歩を踏み出したところである。
(免P=教育職員免許取得プログラム)



児童生徒会主催のエビ網漁の様子。エビ網が解禁になる5月の早朝に、保護者や地域の方々との協力のもと海に網をしかける。子どもたちは主に棧橋で網からエビや魚を外す作業をする。今年度は2回行われ、各回とも伊勢エビが5、6匹と大漁だった。

15の旅立ちへ、生きる力を

「どんな時代でも」「どこにいても」「誰とでも」生きていける力を子どもたちに身に付けさせること、私が大学院で学んでいた時、最も大切だと気付いたことです。そしてどんな環境にあっても自分らしい生き方をしていってほしい、今でもその想いに変わりはありません。

「教師」として現場に赴き早3ヶ月が経ちました。私が勤務する御蔵島村立御蔵島中学校は東京から南へ約200km、三宅島と八丈島の間に位置する人口300人ほどの小さな島、御蔵島にあります。島唯一の学校は小中併設校で、19人の小学生、9人の中学生が一つの校舎で互いに協力し合い、高め合いながら日々多くのことを学んでいます。

小中併設校での教育活動には多くの利点があります。そのうちのひとつが英語教育での連携です。小学校英語活動は総合の時間の中で導入され始めた頃から学校により取組にばらつきがあり、中学校へ入学する際に生徒によって英語の習熟状況が異なるという問題が指摘されてきました。御蔵島小学校でも英語活動を行っておりますが、ここではそのような問題が一切ありません。私もアシスタントとして授業に参加しているため、小学生がどの程度英語に触れているのか、どのくらいのかという力を付けて中学校に上がってくるのかということを見ることができず、その結果、中学校では何を指導すれば

よいのかということがより明確になると感じています。

大学院では総合的な学習の時間、主に国際理解教育の研究をしてきました。その時から、生徒主体の授業を行うことの重要性を感じていました。米国から帰国した後、教師主導で一方的に進む授業に自分自身が再適応できなかったという理由でした。しかし実際に自分が教壇に立ってみると、生徒が授業の主役にする以前に、彼らから「学びたい」という意欲を引き出すことがいかに大変であるかがわかってきました。Now & Hereということをお大切に、生徒は今何を知らたがっているのか、彼らの目の前にある興味は何なのかということを見据え、授業を組み立てるようにしています。現在上教大で学んでいるみなさんも、実際に現場に出てみると自分が理想としていた授業や指導が行えないと感じることがあるかも知れません。しかし本気の想いは実を結ぶものです。自分が「これだ!」と思った信念は忘れずに持ち続けていってほしいと思います。

島には高校がないため、御蔵の子どもたちは「15歳の旅立ち」を余儀なくされます。その子どもたちが島を離れたあとでも自分を見失うことなく生き抜いていけるよう、「生きる力」を伝えていくことが現在の使命だと思っています。



小学校3、4年生の英語活動の様子。小学校では3～6年生が週一回の英語活動を行っている。専科の教員が主導のもと授業が進められ、各学年の担任や中学校の教員がアシスタントとして参加している。



全校朝会の様子。朝会には体育朝会と音楽朝会、児童生徒会が進める黒潮集会有り、小中学生と一緒に参加する。写真は体育朝会でフォークダンスを踊っているところ。



普段は給食だが、年に数回「みくらっつて弁当」といって、弁当を食べる日がある。この日は本来は外で食べる予定であったが、あいにくの悪天候のため、体育館での実施となった。